

語り直す歴史から女性へ：  
『ブライズデイルロマンス』における歴史性と女性

佐久間 みかよ

ホーソーンがニューイングランドの歴史から物語を立ち上げようとした時、このニューイングランドの知的活動に多義的に影響を与えていたのがトランセンデンタリズムであった。ホーソーン作品は多くの場合、この歴史とトランセンデンタリズムに対する彼自身の評価の撞着の様をあらわすこととなる。本稿でとりあげる『ブライズデイルロマンス』では、トランセンデンタリズムから派生した改革思想の批判という図式的な理解が可能であるし、また、カヴァデイルという語り手に注目する時、心理分析という近代小説への糸口となる作品という批評もある。そこでホーソーンという当時のニューイングランド文化にあっては特異なメンタリティの持ち主が同時代的に題材を採った作品という観点で、この作品を再考することにより彼の抱えていたニューイングランドという歴史的現象に起因する問題が、ブルックファームという改革思想に基づく共同体の失敗という同時代性の題材の中にテーマとしてどのように解消されているか考察してみたい。

ホーソーン作品の歴史に対する興味は、彼に文学の方法と主題の双方を与えるものであり、歴史の語り直しという基本構造が彼の文学そのものを語りの世界と語られない世界あるいは可視の世界と不可視の世界という二重構造の世界を形成させるものとなっていると理解してよいと思われる。ブライズデイルでは語り手カヴァデイルが知りえない、または明らかにしない世界が本質的世界である可能性も示唆される。しかし、ホーソーンは読者にどちらが真実かという種あかしをいっさい行わない。語りによる世界と語りから疎外された世界という、ふたつの世界は乖離されたまま提示される。この二つの世界の乖離は社会のモラルと小説のモラル（小説のモラルとはつまり読者の共感を呼び起こすかどうかということの意味しているのだが）の乖離をあらわしているともいえる。逸脱したものへの共感、物質主義万能の世界の到来の予感と、これへの対抗文化としてのトランセンデンタリズムの流行という知的風土にあって、どちらにも背をむけて歴史に興味を引かれていたホーソーンメンタリティから生まれたものであると思われる。ホーソーンがカルヴィニストであるにしろないにしろ、ニューイングランドはかつてカルヴィニズムの影響が行き渡っていたのであり、歴史家としてのホーソーンがこの事実を見過ごすわけにはいかないのは、当時ニューイングランドで影響力を持っていたトランセンデンタリズムを文学者ホーソーンが無視しえないのと同様である。<sup>1</sup> ホーソーンは歴史という知

識から逃れられないのであり、知識のあることが、罪の意識を形成してゆくことは神学をもちだすまでもなく納得のいくところであろう。それではこの『ブライズデイルロマンス』において、罪を感じさせる知識に関してどのような解釈が可能であろうか。

まず注目したのは、語り手カヴァデイルにとっての罪の意識である。カヴァデイルの語りについては、終始主要人物3人の人格と運命の分析に費やされている。彼がその語りのなかで何度もくりかえすように、その分析は彼自身の認識の限界をこえるものでもないし、また彼らの運命に興味をもち、ただ“知る”ことへの情熱に憑かれる自分のモラルを自嘲的に語ってもいる。カヴァデイルの語りは覗き見趣味による興味と範囲をでないという批判もある。信頼できない語り手としてその曖昧性を問題にする批評もあった。しかしホーソーンは、一人称による語りという結果的にその語りの意図が問題となることは別に、いつもと同様作品自体にはカヴァデイルをこえた世界の存在を提示している。それではなぜカヴァデイルが語り手となるかという語りの内容の外部にある問題をたててみてもよいだろう。

自らを何も達成できなかった元詩人というカヴァデイルの語りが構築した世界に、カヴァデイル自身のアイデンティティを重ねあわせて考察する時、彼が見ていたもの、見たいと思ったもの、そして語りたかったものの差異が明らかになる。これらの差異をみることで、カヴァデイルの罪の意識が明らかになるのではないだろうか。それは、ホーソーンにおける歴史への執着と改革思想やトランセンデンタリズムへの不信というメンタリティのあり方が、小説がモラルを提示しようものであるという考え方に基づく時、現実にあるもののなかに善をみようとする態度に対し罪の意識を感じずには描写できないように強いているように思われるからである。それでは歴史に焦点をまずあてて罪の意識を考察してみたい。

## 1. エリオットの説教壇—歴史化されるインディアン

この作品の舞台となるブライズデイルという共同体に関し、かつてのピューリタンのニューイングランド共同体をそのモデルの一つとしているところがある。そしてホーソーンはある章のタイトルでニューイングランドの伝説的人物の名をあげるのである。“エリオットの説教壇”という章である。“エリオットの説教壇”はこの作品のなかほどに登場する。ブライズデイルでの生活にも慣れたカヴァデイルがホリングズワース、ゼノビア、プリシラとともにサバスである日曜日の午後に出かける場所がエリオットの説教壇である。ここは二百年前、マサチューセッツ湾岸植民地へ移住したピューリタンのひとりジョンエリオットがインディアンに説教したという伝説の地であるとしている。<sup>2</sup> その地の岩に登り、ホリングズワースが説教をするのであるが、彼はとくに3人を教化するでもなく、しかし情熱的に語るのである。この演説のあとゼノビアが女性の解放について説きはじめるが、議論は並行したままおわるという章である。このシーンで明らかになるのは、ゼノビアが情熱的な性格の持ち主であることとホリングズワースが父権的イデオロギーの持ち主であ

るということである。演劇性をともなったこのシーンは後に、小説中カヴァデイルが想起する形で、立ちつくすゼノビアと横になるホリングズワース、そしてそのかたわらに座るプリシラという構図になって何度もあらわれるのである。ここでの構図はこの作品全体の人間関係の基本型を示唆しているように思われる。

まず、エリオットという人物の名を挙げた点から考察したい。エリオットの提示の仕方は“ロジャー・マーヴィンの埋葬”におけるインディアンとの戦いのひとつであるラヴウェルズの戦いが参考になるであろう。義父をおきざりにしたという真実を話せなかったリューベン・ボーンモラルジレンマがこの作品の中心にあるわけだが、その伏線として凄惨を極めたとされるインディアンとの戦いがあることが最初に語られる。後にリューベン・ボーンは相続した土地の有効利用に失敗し、フロンティアへと開拓を余儀なくされる。そしてかつてインディアンと争った地へと足を踏み入れることにより贖罪としての息子殺しをすることになる。ホーソーンは作品のなかでインディアンにふれながら、モラルの問題が含蓄されう仕掛けをしている。『ブライズデイル』の場合、インディアンの説教に尽力したエリオットは何を意図して持ち出されたものであろうか。エリオットが説教したというプレイングタウンはこの作品の舞台であるボストン近郊に点在する。ここでエリオットについてカヴァデイルは神聖なる使徒として思い出しているのだが、その個所に注目しよう。

・・・かつてエリオットの説教の声が響き渡ったあの松の原生林はもうずっと以前にその面影をなくしてしまっていた。だが、表面が全く自然のままで、ひどく荒れている地面は、かつて一度もたがやされたことがないということは一目でわかった。松の他に楓やぶなや樺の木などが原生林にとってかわっていた。もしエリオットの頃のインディアンの、何世代も後の末裔が、生きていれば、ここにウィグワムを建てて暮らしたいと思ってもおかしくないほど、昔ながらの野生のままの森の姿を今なおとどめていた。勿論こういった新しい世代の木々にはあの原始の森のもっていた堂々たる威厳の感はない。

(中略) その出口や、そこをちょっと出たところには、季節になると、ほのかに白く苧環が生えたり、葦が生えたりした。悲しく遠慮がちに引っ込んでいるその姿は、ちょうど私たちが初めてあった時のプリシラの姿に似ていたー太陽の子でありながら父を知らず、所詮他人でしかない湿った苔の間で生きているのだ。岩の天辺には樺の木がはりだしていて影を作っている。それは説教壇の反響板の役目をしていた。この蔭の下で私はよく、肉眼を閉じ、想像力の眼を開いてインディアンたちに説教をしたというその聖人のことを心に描いたものだった。木の葉を漏れてくる日光が彼の上に降りかかり、微かな光の衣装で以って、神々しい姿に変容する彼の姿を包んでいるーそんな光景を思えがいていた。(134-5)<sup>3</sup>

ここで注目したいのはエリオットゆかりの地がいまでは荒地地であるということと、それがカヴァデイルの語りによって木漏れ日の射す神聖な場所へと意味づけられているという点である。いまでは荒地地になったという記述に注目しマドックスはエリオットのインディアン教化が歴史的に失敗におわったことをホーソーンが無批判に是認しているとしている。<sup>4</sup> ここでひとり演説を展開するホリングズワースとそれに聞き入るプリシラの構図はエリオットとインディアンに摸しているように思われる。悲しく孤独にさく董はプリシラだけでなく、インディアンの姿も重なってくるように思われる。すると作品全体を通して語られるホリングズワースとプリシラの関係というものは教化するもの（白人）と教化されるもの（インディアン）という関係が2重映しとなってくる。と同時にホリングズワースの演説者としての力量の高さも示しているのである。

そもそもこの物語自体が、序文にあるようにホーソーンが体験したトランセンデンタリストの農場ブルックファームのものであることに注目するまでもなく、ホーソーンはこの時代に人々の意識に影響を与えていたトランセンデンタリズムとその社会的あらわれである改革思想に対して深い懐疑の念を抱いていた。インディアンへの教化という歴史的事実とその後のインディアンの不在の歴史をみた時、マドックスのように、歴史家としてのホーソーンがこの不在を不在をして正当化あるいは歴史化したと解釈することはできよう。しかしこれを小説中にあらわした時、今は不在であるがそれゆえに想起される対象として想像力を駆り立てるものとして、不在のもつ力としてあらわされてしまったのではないであろうか。今はいないインディアンと、聖人としてのエリオット像、そしてエゴイスティックなホリングズワースという人物造形を結ぶ何かがホーソーンのメンタリティに存在していたはずである。インディアン伝導と改革思想は、本性を善へと変えるという意図に基づいているという共通点があげられそうであるし、共にその思想の伝達には公共な場で論じるといふ演劇性が必要であったであろう。かつて牧師が担っていた説教による思想の伝播は、改革論者達の演説という形となりかわっているといえよう。そして結果としてのインディアンの不在は、改革論者達の結果をも示唆しているようである。

エリオットのインディアン伝導は失敗に終わるわけだが、ホリングズワースとプリシラの関係を見る時、プリシラは徹底してホリングズワースに対し従順な少女として描かれる。後に考察するが、プリシラの性的側面に最初から気づいているのはゼノビアだけである。女性に従う性であるという考え方は、キリスト教における神（男性）に対する人間の服従（女性）というメタファーが想起されよう。歴史家ホーソーンは、このレトリックを駆使しニューイングランド共同体はできあがっていったという認識をしていたと考えてよい。ブルックファームに参加したカヴァデイルはそんな共同体幻想にひかれていたのではないだろうか。かつてウインスロップは愛による服従というレトリックにより共同体のつながりを提唱した。しかし、『緋文字』においても明らかなように、ホーソーンはニューイングランド初期のマサチュ

セッツ湾岸植民地のモラルのありかたについて偏狭であるという捉え方をしている。政治的意図によって作られたジェンダーではなく、自然な性の発露を求めるヘスターという女性をホーソーンは描写の面で好意的に描き出している。ニューイングランド植民地がホーソーンの歴史観のなかの原風景であるわけだが、ホーソーンはこれに対し必ずしも神聖化して描いているわけではない。むしろ、その共同体から逸脱した人々を好んで描いたともいえる。ヘスターばかりでなく、“メリーマウントのメイポール”にでてくる祭りの男女なども、ピューリタン共同体からの逸脱者であり、これらに対し、ホーソーンは共感を持って描いているように思われる。しかし、インディアンについて作品でその存在を述べながらも、実際には不在であることが多い。ホーソーンの時代背景を考えれば、インディアンは滅びることが決定したものであるとしてすでに歴史と捉えていたからとも考えられる。それでは歴史化されたインディアンをひとつの表象としてとらえた場合、罪の意識の表象であるという捉え方もできる。この作品におけるエリオットという聖人化された人への言及は、インディアンというものはや共同体の外部の話でありながら、その消滅という歴史性ゆえに、彼らへの搾取という罪の意識を意識の上にものぼらないものとして我々を救い出すひとつの装置として働いていると考えてよい。エリオットのように植民者たちは共存の努力はしたが、インディアンは消滅する運命にあったという歴史の力が働いたのだとする認識は、ホーソーンの女性像にも微妙に影響してくるのである。

## 2. 女性の性の差別化

それではこうした力関係のなかにおかれた女性達はどのように描かれているだろうか。教化するものとされるもの、支配するものと従うものという力関係のなかでは、女性は後におかれる。この典型がプリシラであり、ゼノビアから“男が何世紀もかけて作りあげた女性像の典型”（139）と評されている。プリシラは弱さと捉えがたさゆえに、まわりのものから庇護したいと思わせる少女として描かれる。こうしたプリシラは精神的な存在と捉えられそうだが、ゼノビアはその前歴の針子であることを重視する。針子はこのころ娼婦的女性も示し得たことを考えると、プリシラの肉体性が問題となってくるであろう。ゼノビアのもとへ逃れてくる前、ウエスターヴェルトによってヴェイルの女として操られていた時、霊的で精気のない肉体をヴェールで覆われることによって肉体性が逆に影となって強調されることとなっていた。か弱さと肉体性のなさゆえにその内側にある性は、これを見るものあるいは繰るものが引き出しうるものとして存在している。これと対象的であるゼノビアは生氣と動きを表わす女性として描かれる。

柔和さ繊細さなど、どこにでもいくらでもみつかるだろうが、ゼノビアの美点は、いくつか挙げると、溢れるばかりの艶であり、健康であり、活気であって、これだけでもう男性は恋してしまいそうなのだ。静かな気分のときの彼

女は、むしろ怠慢な感じだが、何かに一生懸命になったり、特に、苦々しい思いでもしたりすると、全身に活気が漲った。（４３）

ゼノビアは行動する女性それも、自分の意志で行動する女性として描かれるが、彼女の過去を知る時、それは感情に流されたものであることを我々は知る。カヴァデイルが自らの観察として語るところだが、エリオットの説教壇でゼノビアが女性には自由がなく発言する機会も与えられていなかったと女権論を展開する時、カヴァデイルはゼノビアとウェスターヴェルトとの一件を知っているため、彼女の社会に対する怒りは私的な感情からでたものであると我々に知らせるのである。ゼノビアの知性に関して、カヴァデイルは次のようにも述べている。

他に幾らでも可能性があったにしろ、彼女は政談演説家タイプの人間だったのだ。ゼノビアには厳しい教養というものが認められなかった。彼女の精神は雑草ばかりがはびこっていたのだ。心身共に弱っていた私は、時々、彼女の思想の粗雑さに驚いたものだった。彼女にかかると、人間の作った制度など、簡単にひっくり返されてしまうし、まるで扇子で扇ぎ飛ばすみたいに簡単に吹き飛ばされてしまった。女性改革家が社会を攻撃する際は、生命の原点というもののあり所を本能的に嗅ぎ付けて、その地点を狙い撃ちする傾向がある。特に男女関係がまっ先に注目されるのは当然のことである。（６８）

彼女の論理は、教育ではなく当時の様々な風潮から本能的に選び取って成り立っているものだということを指摘している。この後カヴァデイルはゼノビアの肉体的美しさをのべ、さらにその物腰は結婚したことある女性の性からくるものではないかと男の勝手な推測として付け加えるのである。女性の肉体的成熟、美しさが結婚によったものである時、正統なものとして記述しうるものであったことが推察される。したがって正統な美しさを主張しうる彼女が、どう間違ったのか結婚相手としてでなく愛人としてホリングズワースを愛するようになっていく様を、カヴァデイルはもどかしさと同情の念で語っている。女性の権利を主張し、公的存在として演説もするゼノビアが最終的に自分の場所を探しだせず死を選ぶというなり行きは、自分自身で選択をする女性としては緋文字のヘスターが選んだ道よりもさらに後退した女性像ではあるが、社会と人生と情熱の間の力関係のなかで翻弄されていくという点ではより近代的な人間であるとも解釈できよう。カヴァデイルがホリングズワースを否定的にみているため、ゼノビアがホリングズワースなどを愛するのが読者には謎である。しかし、ウェスターヴェルトも指摘するように、ゼノビアは愛する対象を伴侶として絶えず求めていた女性でもある。結婚も彼女にとっては一つの自己実現の手段であったわけであり、一度それに失敗すると、今度は結婚によらないいいわる同棲生活を試みようとするがこれも失敗におわるのである。性の発露を生気

として顕在化しているゼノビアは、その精気の強さゆえに居心地の悪い存在として物語の外へ放りだされるだけでなく、死体搜索の際に、ホリングズワースによって乳房を傷つけられ、祈りを求めてもがくように奇妙に折れ曲った姿となって発見されるというグロテスクな悲劇性を与えられてしまっている。セクシュアリティを顕在化する女性、カヴァデイルがその美しさを記述するものの、その人の人生には破滅が待っていることになる。

ところで、カヴァデイルが語らない世界において、セクシュアリティを体現するのはプリシラのほうである。ゼノビアの語る“銀ヴェイルの女”は、ゼノビアがウェスターヴェルトから聞いたプリシラの話であると思われる。ここでプリシラは彼女を尋ねてきた男にヴェイルのまま接吻せよと迫ると語られる。しかしプリシラはこの話を聞きヴェイルを被せられると気絶してしまう。実際のプリシラはヴェイルの女として大衆の視線にさらされる演技者である。<sup>5</sup> それがウェスターヴェルトによる疑似科学的方法であれ、彼女は公衆の面前で演技する女優なのである。しかし、彼女の演劇性は徹底した服従のもとになされるという主体性のなさも示されている。カヴァデイルが、プリシラの父ムーディーことフォントルロイから聞いた話としてプリシラの生い立ちを述べる章がある。そこでは、プリシラは失跡した父と暮らす薄幸の少女として語られるが、不思議な能力をもつ少女としても描かれる。しかし、この語りをする前には次のように付け加えるのである。“彼の話の主要部分は、以下にお話しする通りである。ただ、それを記すに当たって、私はいささかロマンチックな、また伝説めいた筆使いをしてしまっているかもしれない。几帳面な伝記作家ならね三文文士ゆえのことである”（191）。つまりすべてをありのままに書いているのではないというカヴァデイルの語りから疎外されているものはプリシラのセクシュアリティである。不思議な力（透視能力といいかえてもよいだろうが）を持つプリシラのところには何人も訪ねるものがあるという記述のしかたがなされるが、これを売春行為であると解釈する説もある。<sup>6</sup> プリシラが肉體性を剥奪されて描かれれば描かれるだけ、彼女の性はその陰画として主体性を剥奪され消費されるものとして示唆されるのである。

ゼノビアに象徴される女性はいわゆる新しい女性として公的な役割を負っている様が語られるが、この新しい女性の限界も示される。ヘスターのように自分自身の場を選ぶことなく、最終的に自分の場をなくし死へとおいやられていく。この原因となるのが、ホリングズワースの変心である。ホリングズワースの変心についてゼノビアの富の喪失がその引き金となったと示唆される。が、これは彼女の父でもあるムーディーによってなされた事実を考えあわせると、ゼノビアは父と愛人から二重に裏切られたことになる。女権論を述べながらホリングズワースに従おうとするゼノビアに関して、かつてカヴァデイルは“雑草”のような思想に取り巻かれていると分析していた。このもとを探るとゼノビアの生い立ちにおける母なるもの不在が指摘される（198）。そのため誇りたかく振る舞うゼノビアであるが、“適切

な抑制を受けることのないまま、彼女の性格はひとりでにできあがっていくに任されていた（どんなに厳しくまた賢明な男性でも、女子を支配し導くことは適わないものなのだ）”（198）と形容されるのである。ここで注目したいのは母の不在である。母性の不在による女性としてのモラルのなさがゼノビアを行動的だが情緒に溺れてしまう女性として描いているのは、母による教育という19世紀的家庭万能主義に拠ってなされているようにも思われる。新しい女が、家庭の庇護から出てひとりの人間であることを求めるのは、そもそも家庭性の教育が欠落していたからだという指摘は19世紀の言説がなせるものなのだろうか。カヴァデイルの語りを通して、女性と性と結婚という関係を女性の側の選択の問題として提示している一方、カヴァデイルの語りの外部の世界によって、この選択は意志によってではなく、お金という社会の力学に翻弄されてなされたものであることを我々は推測させられるのである。公共の場にあらわれる女性の存在とその魅力を描きつつも、その人生の失敗も描いてしまうのは、可視のものと不可視のものの双方を描かずにはいられないホーソーンのモラルであるといってよいであろう。

### 3. 都市生活者カヴァデイルの視点

カヴァデイルが物語中何度も思い出すのが、エリオットの説教壇での三人の構図であるが、これはカヴァデイルの想像力の回帰点となっているからである。ホーソンはその序文で、この三人を、“自分中心の博愛主義者、高貴な精神をもちながら女性という制約に抗し傷ついていく女性、そして敏感な神経が予言者のような性格をあたえてるか弱き乙女”として要約しているが、この3人の関係を示すのが、エリオットの説教壇の図なのである。カヴァデイルが何度も思い出すこの構図はカヴァデイルにとっての3人の男女のありうべき姿であると思われる。真実を知りうる様々な局面でカヴァデイルは、それを回避しているようにも思われる。そして真実を語ることをためらうというモラルが、実は実際に行われたことを隠蔽し、不在のものとしてみてしまう意識をつくりあげているのである。このエリオットの説教壇の場面でのカヴァデイルは、眼を半分閉じてイメージを思い描くとある。すると半分開いた目はこの3人の構図をしっかりと刻んでいるのである。実際に3人の間でかわされた愛憎を知ることなく、端的にこうして図式化することで、カヴァデイルは自分自身の認識を歴史化しようとしているといえる。歴史認識における事実の単純化にはイデオロギー操作があるように男女の間の関係を第三者が知る際にもイデオロギー操作があることをホーソンは示唆していたといえよう。

それではこうしたモラルの問題の提示はカヴァデイルの語りがするわけだが、カヴァデイルは何者かという問題が残る。語り手カヴァデイルがブライズデイルを離れボストンに戻ってくる章がある。かつて住み慣れた都会であるにもかかわらず妙に違った印象を受けると語り、次のように記されている。

美しいもの、本来の特質や傾向をより真実に映し出すもの、遥かに重要な意



味を暗示するもの—こういったものは、街の住居であれ、表玄関よりも裏側において一層多く見られる—一般原則としてこれも注意してよいことだ。表玄関は常に人工的なものであって、世間の目を意識して作られており、それゆえ、それはヴェイルであり、遮蔽物である。実在は背後に潜んでいて、みかけだけのこけおどしの姿を前衛部隊みたいに表に出しているのだ。

(163)

ホーソーンの闇の世界にこそ彼の本質があるとするメルヴィルの評をパロディにしたような一節である。しかし、一方でこうした目で周りをみまわすと、街の喧騒はひとつひとつがそこに生活しなならかの関係を持って生きている人のたてる様々な音であることにカヴァデイルは気付くのである。こうした興味の持ち方は近代小説をささえるリアリズムの見方であるといつてよいであろう。<sup>7</sup> 近代小説の対象たる登場人物の生活の中にはいりこんだ描写の戸口にホーソーンが身をおいていることがわかる。ホーソーン自身が中間地帯として好んだ描写は、一方でこうして近代リアリズムへの関心に結びついているように思われる。しかし、方法としてホーソーンがそこへ向かわなかったのは、ありのままの現実を描くことが、“表玄関からの”記述の過ぎないという見切り方をしていたことがうかがえる。

序文においてカヴァデイルは人生を熱っぽい願望をもって始めたが、若々しい情熱がなくなるとそんな願望もなくしてしまった二流詩人としてあらわされる。彼のこうした内面の定義付けとは別に、本文では彼が都会の中流のインテリ青年であることが記される。まずプライズデイルにやってきて、自らが行わなければならない農作業に対し違和感をおぼえている。友愛という精神によって自分とは違う知識レベルのひとと交わることにためらいを感じ、そうする自分に対し自己正当化を行わなければならないのである。また自然のなかでこそ真の美しい詩がかかるのだ(42)といいつつ、あまりの農作業の激しさに心身を消耗し、肉体労働と精神活動は両立しないと述懐する。事実彼は、病にかかり寝こんでしまう。しかし病のあと、彼は再生し新しい自分になったとする。これはその後の展開で明らかだが、カヴァデイルがホリングズワース、ゼノビア、プリシラという人間観察の興味の対象を見出したからである。詩人から小説家への変身といつてもよいであろう。カヴァデイルが、プライズデイル牧場でであう3人の人物ゼノビア、プリシラ、ホリングズワースにとりわけ興味をもち彼らを知りたいと願うのだが、自分のそうした欲望はなんなのかと分析する個所がある。

男であれ女であれ、人間を個人的にとりあげてその研究にばかり没頭するというのは、私には健全な精神の活動とは思えない。研究の対象が己の自我である場合、結果はもう見直す迄もなく、明らかに病的な心の働きとなることは確かだ。或いは、誰か友人を思いのまま研究の対象にして、顕微鏡のレン

ズの下に置くとすれば、それは、彼を本来の諸々の関係から切り離して、特徴だけを不当に拡大したり、必然的に部分へと解体してしまうことになる。そしてその部分の結合にしても、全くお粗末なものとなってまう。生身の人間の中には諸々の欠陥はあるにしても、仰天するほど恐るべき一面というのは、往々にして、私達の方で勝手に作り上げたものであるというのは、これ自体驚くべきことなのだ。（91）

この一節はヤンググッドマンブラウンに描かれるスペクターエヴィデンスを想起させるものがある。ブラウンが森のなかでみるのは彼の村の人々そのものではなく、その影のような存在なのであるという説である。“見る”ということに関して、ホーソーンは実体からあらわれた影のような存在（顕微鏡による像）に実体の真の姿があると思わせておいて、その実、それは我々の創造力あるいは分析力の賜物なのであるという、見ることにそのものにたいする不信感を抱かせる記述をする。見ることでそしてそれを書くことについて留保をつけようとする姿勢は、見ることの先に真実を知ることに対して恐れがあるからではないだろうか。ホーソーン作品に共通することともいえるが、問題なのは真実ではなく、真実を知ることあるいは明かすことにとまなう罪の意識である。これをモラルといいかえることができるのではないだろうか。カヴァデイルは見るもののモラルに関して次のように語る。

いまとなつてはどんなに心の糸が弾けちぎれようとも、その痛みに耐えるより他はない。ずっと以前に切り取られた手足が痛むみたいに、昔の生活がその後の生活に尾をひくときの、あの心の痛みに耐えるより他はなかったのである。私は、どうしようもなく捕らえどころのない後悔の念で一杯になっていた。果たすべき義務を果たさぬままにしてきた思いが強くなった。運命に立ち向かって行けそうな力と、同胞たちを不幸から守るくらいの力は持っていないながら、私は彼らに手を貸すことをしなかったのだ。人の情熱や衝動を覗きみては想像を逞しくする冷たい、本能とも知性ともつかぬ性向が強かったあまり、私は心を非人間的にしてしまっていたのであろう。（167）

カヴァデイルはかつて側にいて観察者に徹する時にも一種の罪悪感を感じていたが、またその場から身を離してしまうことにも罪の意識を持っているのである。

こうしたカヴァデイルの背中を押してやるかのように、ホーソーンは彼が再びゼノビアに会うプロットを用意する。カヴァデイルが見やっていた窓にゼノビアが姿をあらわすのである。そしてカヴァデイルは破局がくるならこいと彼らの運命をみすえる覚悟をするのである：“私の知性が、いずれにせよ、敬虔な気持ちと悲しみをもって、この出来事の意味とそこにあるモラルを推し量ることができるのなら、私は思いやりの気持ちをもってことのなり行きを見守るのが自分の役目であろうとおもうのだった。”（170-1）自分自身の人生と引き換えに彼らの人生を見る

ことに徹しようとするのだ。

観察者としてのカヴァデイルをみる時、彼が都会の中流の知識階級の青年であったことが思い出されるが、ゼノビアに対する追求を見る時、彼がこの意識にとらわれていることがわかる。<sup>8</sup> ゼノビアがブライズデイルでみるような服装でなく、高価な衣装と首飾りを身に着けしかも彼女を特徴付けていた髪飾りまで、宝石細工であるのをみた時、彼女自身が“つくりもの”であるかのような印象を受けるのである。そこで彼女の本性がどこにあるのか探ろうとする。人間は一面的でなく、二つ生活をもつことも可能だというゼノビアをカヴァデイルは認めようとしないのである。ウエスターヴェルトに初めてあった時も、カヴァデイルは自分と違い瀟洒な身なりをしたウエスターヴェルトに反感をもち、知性の面では洗練されていないと描写していた。こうした見方は、おそらく都会の知識階級からでてくるものであることをホーソーンは匂わしているといえよう。ゼノビアの父がもともと西部の大金持という設定に注目することもできよう。東部からみた西部、中流からみた上流というものが、なにかいかがわしさをもって捉えられていたといえる。ホーソーンのうまれ育ったセイラムでも、海運業の衰退から、工業へと産業基盤が変化していく時代であり、経済の変化にともなう富裕層の変化、様々な階層の人々の都市への流入という時代背景を考えれば、彼がみせるゼノビアへの反応も納得させられる。それはいままでの伝統的ニューイングランドから生まれ育った中流の若者がみせる新しい階層への懐疑ともいえよう。つまり、そうした都会の中流層の意識の中では、女性の性は消費するものであるという通俗性を隠蔽し、性を隠蔽せずに主張する知性を備えた女性を認識するものの、やはりこれも“共同体”の外においてしまおうというメカニズムがはたらいているといえよう。

#### 4. 語りの世界への囲い込み

カヴァデイルによる語り直しという装置を経て明らかにされるのは、再びニューイングランドで起こった共同体運動の崩壊よりも、共同体のなかで拮抗した女性をどう評価するかという問題であったように思われる。ゼノビアの経済的破綻による破滅とプリシラによるホリングズワースとの結婚生活をカヴァデイルが語ることで結末をつける。知性的だがモラルの面で粗野なところがあるとされる情熱の女性ゼノビアは、ホリングズワースという男性中心原理を体現するような男に身も心も捧げて破滅していくのである。そして、プリシラはホリングズワースと結婚し、いわば去勢化されたようなホリングズワースの庇護者のような役割を負っている。ゼノビアというセクシュアリティを顕在化する女性が破滅し、一方でプリシラというセクシュアリティを隠蔽している女性が、妻の座を獲得することに関し、あの“私はプリシラを愛していた”というカヴァデイルの唐突な告白のなかに、プリシラの従順さへの憧れとなってあらわされているように思われる。

物語中、何度もカヴァデイルが付け加える私はすべてを語っているのではないと

いう留保は、語らないことの美学を強調しているようにも思われる。すると、語られないことが、ホーソーンにとってモラルの上で問題となっていたと考えることができよう。語られないこととは、プリシラのセクシュアリティであるわけだから、彼女に主体性がないことを考えると、これはプリシラのセクシュアリティを繰っていた男の側の論理であるともいえる。ゼノビアが女権論を展開する際に、女性は言葉を書くことでなく話すことに能力があると述べるどころがある。女性を言語から疎外し表象と捉えているホーソーンの女性観としてよいであろう。女性のセクシュアリティは男が言語化するものなのである。ちょうど、事実が歴史へと転換され、物語化するように。ヘスターやゼノビアという女性を好意的に描きながら、結局そのセクシュアリティを奪うかたちでニューイングランド共同体という場所及び死という場所を与えてしまっているのは、当時のモラルのありかたを映しだしたものであるといえる。女性のセクシュアリティと歴史を言語の語りに閉じ込めようとするのが、当時のモラルであるといえよう。インディアンの不在を歴史の力のなせるものと認識していたホーソーンは女性の性に関しても歴史の力によって不在のものとされてしまったものと受け止めていたのではないであろうか。当時の新しい女性とはかつて歴史上存在した性を発露する女性が姿をかえて現われたものかもしれないわけであり、そしてそれが、当時のモラルによって再び語りの世界へ囲い込まれる様をカヴァデイルという語り手を通して描いていったのではないかと思われる。

カヴァデイルという語り手を通して、読者に手渡されるものはゼノビアの美しさとその悲劇、そしてプリシラの従順な姿であるわけだが、プライズデイルという改革思想と共同体の崩壊という歴史的事実もこの二人の女性像のなかに囲いこまれていったように思われる。こうした語りをするカヴァデイルが都会の中流の青年であるという点は、ゼノビアという新しい女性とプリシラという男の歴史が作り上げた女性像を考えるのに示唆的である。カヴァデイルの位置は、本人もプリシラに対する興味を後に語るように恋愛の当事者たりえるものの二人の女性が彼と距離を置いているために、観察者にならざるをえないともいえる。ことに二人の女性の秘密を知る段になると、それをありのまま記したりはしないと弁明する。彼には観察者として知り得たことをすべて明らかにすることによってかえってこの二人の女性の真実を語ることを疎外すると考えていたのであろう。それは当時の女性に対する中流の男性のもつモラルであるとも考えられる。ことにプリシラのセクシュアリティはあえて隠蔽して語っていると思われる。<sup>9</sup> プリシラは、男が歴史によって作りあげた従順な女性であるとして語られているところに、彼自身もそこに加わっていることがわかるのである。

プリシラという男の歴史が作ったいわば古典的な女性が、ヴェイルを被って大衆の興味を引き付ける演技者として公的な場に姿を表わす様と、新しい女性ゼノビアが、筆名を使い女権運動の論争の場で公的に活躍する様は、女性が家庭から出て公的な場での評価を受けうることを示すものであるが、結果的に二人の演技はいわゆる新しい思想に踊らされているものであることをカヴァデイルの語りを通してホー

ソーンが明らかにしていると思われる。そこにホーソーン自身の時代に対する評価の厳しさがうかがえるが、ニューイングランドの歴史を俯瞰したホーソーンが、この地に見出した興味の対象が女性像であったことは興味深い問題である。

## 註

- <sup>1</sup> ホーソーンのメンタリティが歴史家のものであることはコラカチオの指摘によって明らかにされている。*The Province of Piety* (Durham: Duke University Press, 1995).
- <sup>2</sup> エリオットに関して、ホーソーンは“Grand Father’s Chair”においてとりあげ、インディアンを人間として扱い布教を行った人物と賞揚している。
- <sup>3</sup> テキストのページは、ペイパーバックのノートン版のものであり、以下引用の邦訳は、八潮出版の西前孝訳のものである。*Blithedale Romance* (New York: W. W. Norton & Company, 1958).
- <sup>4</sup> Lucy Maddox, *Removals: Nineteen-Century American Literature & the Politics of Indian Affairs* (New York: Oxford University Press, 1991).
- <sup>5</sup> プリシラの娼婦性に関しては、Alan and Barbara Lefcowiz, “Some Rents in the Veil: New Light on Priscilla and Zenobia in *The Blithedale Romance*,” *Nineteenth-Century Fiction* 21 (1966): 263-94.
- <sup>6</sup> ヴェイルの女としてのプリシラの表象するものについて、リチャード・ブロードヘッドが19世紀の家庭性への離反と大衆文化における演劇への女性の出現をあらわしていると論じている。Richard Brodhead, “Veiled Ladies: Toward a History of Antebellum Entertainment,” *American Literary History* 1.2 (1989): 273-94
- <sup>7</sup> 近代小説に果たした哲学的な個の捉え方と資本主義による個人の自立と疎外から引き出されるモラルの問題を、イアン・ワットは *The Rise of the Novel* で明らかにしているが、ホーソーンのリアリズムの描写への関心はそうしたモラルの問題と不可分であると思われる。
- <sup>8</sup> カヴァデイルの中流意識に関して、ニーナ・ベイムは“カヴァデイルは、快適さと快楽以上のものに目的をみいだせず、また生きていく上で必要な物質的方法と人生の目的を混同している中流のコスモポリタンの生活様式が生んだ産物である”としている。Nina Baym, *The Shape of Hawthorne Career*, (Ithaca: Cornell University Press, 1976): 187
- <sup>9</sup> この作品にあらわれるヴェイルの概念について、ワゴナーは、人が知りたいと思う真実を隠すことから、知ることを恐れているというリアリティを隠すものへと意味が変化していることを指摘している。Hyatt H. Waggoner, *Hawthorne*, (Cambridge: Harvard University Press, 1955): 186